XI. 補論二：「現代認識論」批判　「蝶の雑記帳 117-4」

2022 年と 2023 年に翻訳出版された二つの哲学書を読んで、啓発されて考えるところがあった。その書物とは、ダンカン・プリチャード著『知識とは何だろうか　認識論入門』とティモシー・ウィリアムソン著『哲学がわかる　哲学の方法』の二冊である。表題から分かるように、両書とも、哲学の基礎を解説する入門書である。そこには、現代の哲学者たちが、認識論というものをどのように考えているか、また、哲学の方法をどのようにとらえているかが記述されている。

この論考でわたしは、認識論についてもっぱら自分の考え方を述べてきた。それを現代哲学者たちの考え方と比較することは、独りよがりの考えをとり除くために必要な作業である。さいわい、上に挙げた二書は教科書として書かれた最新の入門書で、この作業をするのに適している。本来は、その作業を徹底させて、わたしの提案する「科学的認識論」を再検討し、記述をやり直すぐらいのことをすべきであろう。しかし、前節までの思索をようやくまとめたばかりで、今は、そこまでの力が湧かない。また、本稿の論述形式にそれなりの長所があると思うので、今の形式を保ったままにする。

もう一度人が認識を始める原点から出発し、現代認識論の考え方と対比しながら考えよう。その考察は、以下で示すように、現代の哲学者たちの認識論に対する批判へと導いた。わたしの最大の疑問は、「現代認識論」は認識について整合的な理論体系となっているか、という点にある。

ここからはプリチャードを現代認識論の代弁者と見立てるが、ウィリアムソンの著作もその考え方がプリチャードからかけ離れているわけではない。プリチャードとウィリアムソンは、現代認識論者たちの考え方と論じ方を代表するように、認識論の教科書あるいは哲学の入門書を書いている、と言うことができる。本稿で用いる「現代認識論」という言葉を、そういう意味と理解してほしい。

（a） 認識の初動と認識枠組みの祖型

プリチャードの教科書『知識とは何だろうか　認識論入門』には、これまでの哲学者たちがしてきた知識に関する立論とそれに対する批判のほとんどが要領よくまとめられているのだろう（この教科書がおもに考察するのは「propositional knowledge」(命題的知識)で、それを日本語で「知識」と表記している）。ところが、その解説は、すべての立論に疑問が提出されて知識に関して不備のない定説はない、と言っているかのようだ。人間が未熟なことは承知しているつもりだが、わたしは、そのような議論の仕方に驚かずにはおれない。現代の哲学者たちが言葉と論理を運用して「知識」を感心するほどさまざまなやり方で論じる議論を前に、途方にくれ、疑問が生じるのをとめることができなかった。人間が修得していくべき知識をこのような仕方で議論して、生きるのに必要な世界観と人間観を確かなものにできるのだろうか。

プリチャードの教科書と同じように身近な出来事を素材

にするとして、別の初歩的なやり方で考えることにする。

ひそかに言葉を修得しつつある乳幼児から始めてみよう。立って歩けるようになる類の修練を哲学者は能力知識と呼ぶけれども、知識という日本語を当てはめるのはためらわれる。二足歩行の能力は、荘子が料理人や射手を典型例として語った技能へ至るが、身体の運動能力にくわえて初歩的でも知性を協働させる鍛錬によって修得される。技能が身心を協働させる認識作用によって修得されることは重要である。

まだ言葉を話せなくても、歩けるようになるころには、向こうのテーブルにあるイチゴを見つければ、そこまで行ってそれを食べることができる。そこでは、知的な認識とそれに基づく行動があり、現実に食べることで認識したことが「真」であることが経験的に検証されている。この出来事について、「ある人が知識を所持するためには、その人がその命題を信じていなければならない。さらに、その信念は真でなければならない」とまわりくどい言い方をして、「知識」を限定的に規定した上で論じることに意味があるだろうか。わたしは、日常的な出来事を、命題知識と呼んで文章化し、「その(命題)知識が真であるか、当人はそれが真だと信じているか」と、頭の中で“言語的に”論じるのは適切ではないと考える。

それよりも、日常的な出来事を「認識」という言葉でとらえて、その認識の当否を問題にする方がよいと考える。認識を主題にすれば、認識活動によって修得された「技能」や「命題知識」を含むことができ、それらについての哲学者たちの

議論を包摂することもできるだろう。カントは、そういう考えから画期的な認識論を提起したのである。Ⅰ～Ⅸで論じたように、認識したことは現実の行動によって経験的に真であるかどうかが検証される、という点が重要である。

幼児は、「うまうま」にいくつも種類があることを知り、しだいにイチゴやチョコレートなどの言葉を使えるようになる。それは、言葉によって概念を識別することを修得する過程である。幼児は、おとなから外国にはバナナという食べ物があるなどと聞かされて、伝聞による知識を増やすことが起きるが、その伝聞知識が真であるかどうかは食べてみるまで確認できない。成長期の人は、さらに、書物を読むなどさまざまな方法でさまざまな種類の知識を獲得していく。その知識は多様で多量であり、一々真であるかどうかを確認することがむずかしい。誰もがそのことを知っている、知識には、自分が実際に真であることを経験できたこと、自分の過去の経験からしておそらく信頼できるだろうこと、真かどうか定かでないことなど、信頼度に差があることを知っている。

成長期の人間は、自身を省みて、自分の認識能力に限界があることをわきまえる。認識によって得られる知識がさまざまに異なる信頼度をもつことを知っているのである。そして、認識能力と言語能力を高めて、単純な悟性認識以上のことをするようになる。理性が、経験によっては検証できないことまで認識しようとする。そうなると、真かどうかを原理的に

検証できない事柄まで知識に加わることになる。真であるか検証不可能な理想上の観念（理念）を知識に含めることは妥当だろうか。プリチャードは理念を含む命題知識が真かどうかを（理念を含まない命題知識と比較までして）議論しているが、そうすることにどこまで意味があるのだろうか。

重要なことは、成長期の人間は、小さくても頭のなかに言葉の集まりからなる辞書をつくっていく、つまり、概念の体系と呼べるものを構成していくという点である。言い換えれば、一人の人間が修得していく知識は構造的な体系をつくり、ある知識はその体系内に位置を占めるのである。だから、個々の命題知識が真であるかどうかを問うときには、たとえ部分的でも、その命題知識が強く関係する集合系が真であるかどうかも問われなければならない。そのことは、プリチャードの教科書ではあまり明確には書かれていない。

今度は、一人前の常識人になったつもりで自省して、人間がどのようにして認識という営為を行なうか、哲学的な言葉を使ってもうすこし筋道だった考察をしてみよう。

認識あるいは考察が始まるときには、漠然とでも表象の形成があり、表象は形式を伴って立ち現われるはずで、認識は「なんらかの関係」を形づくりながら行なわれる、と考えることができる。だから、認識が組み立てていく関係は、乳幼児期の認識の初動において形づくられた認識枠組みの祖型を基礎にして築かれる、と推測することができる。この小節

(a)では、その認識の初動部分を、Ⅸ節までの科学的認識論の枠組みの先頭に接続して考える。

人間の認識の初動を母胎にあるときから考えてみよう。個体発生の初期に身体を形成していく段階でなんらかの体感があると推定できる。身体表面の皮膚は触覚を発達させる途上にあり、母体とその外からの振動に対して聴覚を発達させていくのだろう。その段階ですでに人間の胎児は、羊水に浮かんで、自分を内包する母体さらにその外の環境から物理的作用を受けている。それが胎児にとっての“世界”を規定する。認識主体の胎児は世界をなんらかの構造をもつ広がりとして認識するほかない。遠くになるほど微弱になる作用を及ぼすその世界がどこまで広がっているか断言できないけれども、ニュートン力学で作用を考えるとき境界条件を設定するように、胎児にとっての現実的な認識世界は境界をもつものとしてあるだろう。人間の認識はこのようにして始まるのである。認識の初動で認識枠組みの祖型が形成され、認識活動の進展とともに、認識できたこと（知識）がその祖形のまわりに構造的に付加されていく、と考えることができる。

この小節では、初歩的で常識的な立場から人間の認識というものを考え、プリチャード著『知識とは何だろうか』が主題にする知識とはどういうものかを推定した。しかし、わたしの文章は素朴だとして、言葉と論理に巧みな現代の哲学者からの反論を免れないだろう。叙述文の当否について議論す

るやり方は水かけ論におちいりがちである。序説にあたるこの小節はこれで終わりにして、次の方策へ進もう。

(b)　「現代認識論」のアプローチに対する批判

小節(a)の考察は、知識を問題にするときには認識から始めるのがよいことを教える。その認識についての近代的な学はカントによって切り開かれた。ところが、プリチャードの教科書は、現代の認識論者たちが、知識を論じるとき、カントをそれ以前のプラトンやアリストテレスやデカルトやイギリス経験論者などと同列に並べて考察することを教える。カントの認識論をあまり尊重していない、と思わざるをえない。この素通りにわたしは大きな疑問を感じる。

本文の論述で示したように、成功している現代の自然科学は、基本的にカントの認識論の基礎の上に構築されている。それなのに、現代認識論は、自然科学が出発点にすえるその近代認識論をどうして素通りすることができるのだろうか。ひょっとして、現代の認識論者たちは、個別科学のまねをして知識を具体的に議論するだけでよいと考えているのだろうか。しかし、自然科学の個別部門は、実のところ、近代認識理論を拠りどころにして研究しているのである。哲学で知識を論じる学問領域でも、知識をもたらす認識について考察せずにすませることはできない。知識が真であるかどうかは、認識が妥当であるかどうかにかかっているのだから。

まず、現代の哲学者たちの知識論を、カントの提起した認

識論の問題空間の設定と比較して検討するのがよいだろう。カントは空間と時間を直感の形式としてその認識論を始めたが、そもそも、人間が生活の中でする思考と行動は本質的に時間的なもので、認識という営為は時間軸に沿って起きる動的なものである。前小節でも見たように、人間の認識がどのようにして遂行されるか、自身にせよ他者にせよ時間を離れて観察することはできない。自然科学を参照して言えば、認識は時間を変数とする動的な営為である。通常、時間を捨象して考えられるが、知識も時間の関数としてあることを忘れてはならない。だからこの補論では、時間を明示的に導入して考察しているのである。認識が時間において動的であるととらえれば、新しい視点をもたらすだろう。

現代知識論のアプローチが重大な問題含みであることは、Ｉで示したユークリッド幾何学の事例と対比すれば明らかになる。ユークリッド幾何学では、前提とされる公理・公準を受け入れれば、すべての命題が演繹的に導かれる。そこで導かれた命題はすべて真である。常識的な意味の「信念」がそこに介入する余地はない。プリチャードの教科書が「ある人が知識を所持するためには、その人がその命題を信じていなければならない。さらに、その信念は真でなければならない」とする要請は、人間が知っている最も厳密な知識体系の一つであるユークリッド幾何学では無意味なのである。

さらに「真」について言えば、ユークリッド幾何学が前提

とする「平行」という公準は自明ではない。非ユークリッド幾何学を構成できることが示されて、「平行線公準」は、ユークリッド幾何学の体系を構成するための前提にすぎないことがはっきりした。「平行線公準」を「真」とする支えはないのである。ユークリッド幾何学の命題の「真正さ」は、「命題知識は信じられていなければならないし、その信念は真でなければならない」というような要請文に現われる「真」という用語になじまないのである。

数学ではもう一つ、ゲーデルによって、伝統的な数論の無矛盾性の証明が成立しないことが示された（ゲーデルの不完全性定理）。プリチャードの教科書で「２＋２は４である」という命題を例示して論じられた「真」についての議論は、その命題を含む数論が無矛盾であるつまり真であることに厳正な支えをもたないことを知れば、現代の哲学者の論じ方ではいけないことが判る。

厳密な知識体系の代表である数学でも、「真」の問題は一筋縄ではいかないのである。時間を捨象し、世界のなかで現実存在のもつ具体性をも削ぎ落した抽象的な素材を扱う数学でもそうなのだから、現実の具体的な事物事象を対象とする認識から得られた知識とその体系が真であるかどうかという問題は、さらに複雑でやっかいな問題だと考えなければならない。かといって、プリチャードの教科書でされているように、これまでの論者が提出してきたさまざまな知識とその体系を、無制限な相対主義の立場から論じて列記するだけ

ではいけない。それでは、知識の確実性に迫っていくことができない、もっと有効なアプローチを探るべきである。

プリチャードの教科書を読めば、現代の認識論者たちが、人間が用いる言語あるいは概念が構成できる空間全体で、すべての可能な叙述命題を同列に扱おうとしていることが分かる。すなわち現代認識論者たちは、知識に関して想定可能なあらゆる命題を、人間の対象認識能力の到達深度と精度や、獲得された概念の有効度と明瞭度や、諸概念の関係づけの適正度と強靭度や、諸概念を関係づけて形成される知識とその集合系の真正度と信頼度などを分析的に吟味し評価すことが少なく、考察する問題を平板な“空間”にただ並列に置いて考察しているのである。方法の有効さに自覚の足りないそのような問題の取り扱いで、認識の“問題空間”を適切に分節して、しっかりした結論に達することができるだろうか。

そのアプローチは、手本となる数学が、可能なかぎり自明でより原理的な命題から始めて、自己無撞着な命題の集合を構成しようとしてきたこと、そのために、可能な部分体系に切り分けて研究してきたことを考慮したものとは思えない。また、近代自然科学を切り開いた古典力学が、数学のアプローチにならい、普遍的に成立可能な法則から出発して理論体系を構成したことに敬意をはらっているとも思えない。

それに対して、啓蒙期の哲学者カントは、成功した数学や力学の理論構成を大いに参考にしてその認識理論を構成し

たのである。だから、カントの認識論は哲学の思考法を一新する力をもったのである。それは、ひるがえって力学理論に認識論的な基礎を与え、以後の自然科学発展の礎となった。

カントの認識論と自然科学の方法を統合する科学的認識論のアプローチの特徴を言えばくりかえしになるが、重要なので表現をかえて解説しよう。科学的認識論は、世界を認識主体と認識対象が相対する一体的な構えととらえて、対象の在り方を規定する空間と時間から必要最小限の形式だけを抽出し、対象の要素間の関係を内容にかかわらない最小限のカテゴリーでとらえるようにし、論理的な認識に必要な基本的論理形式だけを挙げて、認識を開始する。“問題空間”をこのように設定するアプローチは、数学や力学が最小限の前提から理論体系を構成する方法に準じているのである。

このアプローチは、認識を、性質や内容を事前に含まないほぼまっさらなところから出発させる。それは、一人の人間が生きて認識活動をして知識を獲得していく現場を叙述しようとする。人間は、まず初めに生得的な感覚器官を用いて事物と相互作用をし、対象を直感的に感覚する。この段階では錯覚が生じることがあるが、多様な経験を積み重ねながら悟性を用いてより真正な「覚知」に近づくことができる。言語を修得してからは、理性を用いて関係する諸事物諸事象の整合的な関係を組み立て認識を深めていく。この段階でも、さまざまな経験的方法で認識は洗練され、統合されていく。

しかし、認識は時間において動的であり、この一連の統合的認識はくりかえされ修正が続く。獲得された概念の部分的な統合系は総合的に関係づけられて、全体として整合的な論理構造をもつ知識の体系に高められていく。

ここで重要なことは、自然を対象とする認識は世界に在る事物との経験できる相互作用によって進展するのであり、認識したことが真であるかどうかは経験によって検証されることである。そうやって獲得される自然についての知識とその真正度は、「ある人が知識を所持するためには、その人がその命題を信じていなければならない、さらに、その信念は真でなければならない」とする規定の言っている「知識」や「真」とは異質なものである。

理性認識の対象が自然物を離れて言語や概念とその構成物になると、認識は経験から遠ざかり、獲得される知識を経験によって検証することがむずかしくなる。認識がそういう対象領域に広がるとき、得られる知識の真正度は信頼性の様相を帯びるようになる。生物である人間が得た知識は、生きていくのに有効かどうかで真価が問われる。人間が行動に踏み出すときには、知識の真正度が問題となり、さらに信頼性が問題になるのである。身心の言葉をともなう行動すなわち言動が現われる実践の場では、人間心理が大きく作用し、その人が形成する知識への信頼つまり「信念」の強度が問題となる（ちなみに、知識から形成される「理念」や「信念」にある「念」

という文字は、それが心に抱かれることを表示している）。

「ある人が知識を所持するためには、その人がその命題を信じていなければならない。さらに、その信念は真でなければならない」とする規定は、むしろ、知識から形成される信念の実践の場での有効性を言っているのである。「真なる信念」とは「良く働く信念」ということになるだろう。

すでに本文で、認識は人間が生きるためにする活動である、と論じた。人間が認識から組み立てる知識は良く生きるためにあるのだ。だから、人生をより良くするように、真正な知識を修得して良く働く信念をもつことが人間の務めである、と言える。真正な知識と良く働く信念が人格と呼ばれるものを構成し、現われる言動が人格の品質を示すのである。

考察が実践の問題領域にまで入りこんでしまった。しかし、具体性を欠く思惟だけでうんぬんすることのむずかしい実践の問題を、ここでこれ以上考えることはやめにしよう。

（c）　諸哲学理論の体系構成に対する批判

この小節では、現代の認識論者たちがほとんど眼を向けない哲学理論の体系構成の問題を、歴史的見方を取り入れて内容に触れながら、批判的に考察しよう。

小節（a）で、一人の人間の認識を、乳幼児から成人への成長過程で時間をかけて進展する動的な働きととらえた。従来の哲学では軽視されてきたが、その見方は認識と知識を理解するのに重要である。同様に、人類の歴史において、先人た

ちが表明してきた考え方・知識・世界観・人間観などいわゆる思想が歴史的に発展してきたものであるととらえることが重要である。人間のもつ認識能力が有限であることは、どんな思想をいだく人も承認するだろう。だとすれば、有限な認識能力を運用して歴史的に発展してきた人類の思想を、批判を欠く相対主義の立場に立って平板に並べ、それぞれの思想が提出する命題が“文法的”に意味をむすぶかどうかもっぱら“言語的に”行なう考察が、方法的に妥当であるか疑問である。むしろ、意味の妥当性を比較考量して評価し、どちらを採るか判断すべきではないか。無謀なことだが、こう考えて、以下では科学的認識論の観点から、なんとかして哲学史上現われた重要な思想を比較考量してみよう。

古代ギリシアの思想

「対話篇」でプラトンは、ソクラテスが自分を無知だとして既知の考え方ではないところから疑問を発しながら考察を進めるのを記述した。ソクラテスを尊敬するプラトンも、そういう前提のないところから出発して考察を進める方法を採った、と推測することができる。プラトンの「現実世界は理想的な世界の投影である」というイデア論は、そういうアプローチによる思索の末にたどり着いた思想なのだろう。イデアを、基礎に置いて反転して進むことをせず、単に理想にとどめるなら、プラトンの思想は科学的認識論と必ずしも相容れないわけではない。プラトンの主題は、事物的な対象

を知ることよりも実践における正義や徳や善にあった。「徳は知識である」という表明は、関心が一般的な知識よりも徳にかかわるような知識にあったことを示している。実践面での人間の思想の進歩ははかばかしくないから、現代でも、プラトンの思索のあとを訪ねれば得るところがあるのだ。

アリストテレスは知的探究「愛知」を無秩序に行なうことの障害に最初に気づいた人、と言えるだろう。人間の探求心が向かうさまざまな対象領域に筋目を入れて分類し、哲学的思索を体系的に構成しようとした。そのアプローチは整序して合理的に思考することを要求する。それはギリシアに「論理学」をもたらした。現代の諸科学は淵源をたどればアリストテレスにさかのぼれるとする意見を否定することはむずかしい。第一哲学と第二哲学とに分けて思考したところにも体系を構造的に組み立てようとしたこと、知識の獲得において経験を重んじたところにも方法に自覚的だったことが現われている。残念なことに、古代、学的方法は思弁的で、人間の知識はまだ十分に発展していなかった。そのアプローチはよい方向へ向かっていたけれども、当時のギリシアの社会と文化が、哲学者にも神について近代人ほどの自由な思考を許さなかったので、アリストテレスに第一哲学を神など究極的な問題を探究する領域と考えさせたのである。

二元論

近代哲学の先駆者となったデカルトは、懐疑を克服するた

めに懐疑を徹底させて、もはや疑うことのできない事実として「思考している人間」を立てた。すべてをその「思考する人間」のもつ理性能力を用いて考察することの表明であり、近代哲学開始の宣言となった。デカルトはアリストテレスの後裔でもあり、哲学全体を形而上学・自然学などの体系的な構成ととらえた。デカルトはそれまでの哲学者よりも方法に自覚的で、数学や自然科学の実践的な研究は、事物事象を、単純な要素に分節して、明証・分析・総合・枚挙吟味の段階を踏んで演繹的に解明する方法へ向かわせた。還元主義と批判されることがあるが、その方法の徹底は還元主義を超えさせる、とわたしは思う。

デカルトは、「考えている人間」を根拠にしようとしたから、人間が知ろうとする「延長物」と対等の存在として「考えている人間」を立てる。また、「考える人間」を存在させる「神」という理念を放棄することができなかった。だから、「物」と思考の根拠となる「精神」（神が万能の精神を保有し、その似姿である人間も部分的な精神の所有に与る）とを二元とする世界を想定した。デカルトの哲学体系は、反証不可能な前提から出発する数学の理論体系とは大きく異なり、論証も反証も不可能な二元の対立存在を前提して世界を考察するのである。この理論では、切り離せる「物」と「精神」の二元の存在を疑問に付すことができない。どんなことでも考えようとする哲学で、それは理論の不備ではないか。

スピノザの世界体系

自由の国オランダに逃れてきたユダヤ人家庭に生まれたスピノザは、何ものにもとらわれない思想のせいでユダヤ教会から破門され、キリスト教徒からも背教者と見なされて、神を信奉せずにすむ立場に立たされた。そのスピノザは、世界全体は必然が貫く自然であるととらえて、それを神と呼んだ。この理論では、神即自然は一元的な存在であり、自然の別名である神は世界全体に沁みわたる非人格的な普遍神である。スピノザの一元から成る理論枠組みは、デカルトの二元から成る理論枠組みと対立する。

主著『エチカ』は、普遍神が必然を貫かせる全体世界を、数学の体系のように、基本命題から次々に演繹される諸命題であるかのように記述する。理論は決定論として構成される。だから、ヨーロッパの哲学が尊重してきた人間の「自由」意思は問われない。それは信仰者から無神論と見なされた。人間を身体性と精神性を統合した一元的存在とするスピノザの考えは、デカルトの考えと相容れない。スピノザは、「考えている人」を「わたしは思惟しながら存在する」と言い換えることで、精神と物の統合を表現する。そこから、人間の身体性と精神性を分節的に考えることを許す。そういうスピノザの考え方は、倫理学でも、人格神を信奉するデカルトよりも現実的なようにわたしには思われる。しかし『エチカ』は、倫理学の外に広がる世界に言及することが少ない。

経験論と懐疑論

そのころヨーロッパは、実際的な諸方法が開発され、知的活動が高揚の時代を迎えていた。近代的自然科学が離陸を始め、他の分野でも近代的な学的研究が始まっていた。先頭をきって近代に突入しつつあったイギリスには、歴史的に現実の経験を重んじる伝統があった。事物事象を哲学的に考究するときにも、人間の経験に照らして思考した。そこには、人間のすべての知識は経験によって得られるという考え方がある。それは、事物は現実的な存在であると考え、事象を実証的に説明しようとする自然科学と歩みを共にする考え方であり、経験という言葉は能動的な観察の意味をおびる。

イギリス経験論の父ロックは、人間が生得的な観念をもつというような古い考えから抜け出て、観念は経験的に得られると考えた。この考え方だと、人間の知識は経験によってもたらされるのであり、それが心にいだかれるとき観念と呼ばれることになる。ロックの知識・観念についての経験的な見方は、続く経験論者たちに引き継がれた。しかし、現代からふりかえれば、経験論者たちのアプローチには、哲学の問題を考究するための理論枠組みと思考を前進させる方法論において足りないところがあった。方法的に整えられていない経験論は、事象の認識に確実性を付与することに弱かった。そのせいで、経験的に得られた知識は、確実性に欠けると考えられ、疑義をまぬがれなかった。その理論には懐疑が生じる余地があったのである。実際に懐疑論を提出する論者が出

た。経験論の堅実さをすくいとったのはカントである。

カントの認識論

啓蒙の時代の円熟期にいたカントは、二元論・経験論・懐疑論などを克服するのに、それらの思考法自体を問題にした。「物と精神」を切断する二元論は、常識とおりあいをつけることがむずかしく、生じる論争を決着できない。世界がどのように在るのかをもう一度問いなおすほかない。カントは、そもそも思考はどのようにして人間に世界についての知識をもたらすのか、根底にある人間の認識の営為にまでさかのぼって考察した。デカルトが出発点に据えた「考えている人」を前提のないところに立たせて世界を認識し始めるのでなければいけない。

そこで、カントは、経験論の精華をとり入れ、認識にとって原初的な世界に、まだいかなるものか不明の対象物とそれを認識しようとする認識主体を立たせて、まだ具体的に内容と性質の知られていないその世界を損なわないように、直感の形式と基本的カテゴリーと論理形式だけで認識を組み立てていく枠組みを提起した。それが、「コペルニクス的転回」をもたらしたカントの認識理論である。その理論は、デカルトの二元論を脱構築して、導き出される知識が確実性を獲得できるようにより高度な認識の枠組みを提出した、ととらえるべきなのである。その構えと形式が、世界と人間についてより確実な認識に導く“問題空間”を整えるのである。

人間の認識を整序するこのアプローチは、経験を論理的に整えて懐疑論を封じこめるように働く。カントの認識論は、経験論と懐疑論を乗り越える役目も果たすのである。

人間の認識がまぬがれない難点

本論考は、カントの認識基礎論を構成しなおして科学的認識論を提示した。ところが、カントの認識論もここで試みている科学的認識論も、ある難点をまぬがれない。

それは、推論を行なうときの帰納法がかかえる問題（帰納の問題）と同根である。帰納法による推論が真となるのは、数学的帰納法のように、関係するあらゆる事例を網羅できる場合である。ところが、自然を対象とする場合には、認識作業から得た命題の真正さを検証する手段が経験以外になくて、可能な事象をすべて実際に検証することは現実的に不可能である。古典力学の例で説明してみよう。力学の法則は、帰納法に準じるさまざまなやり方の探求の末に発見された。その段階で、帰納法は発見法として機能したのである。しかし、いったん発見された運動の法則（運動方程式）はあらゆる運動の現象に適用可能な形をしており、その普遍的な法則は、さまざまな現象に演繹的な説明を与え、それらはみな真であることが検証できる。そこで通常、自然科学の普遍的な形の法則は対象とする事象に対して普遍的に成立する、と言われているのである。しかし、その法則が成り立たないまだ未発見の現象は存在しない、と断言することができない。

もちろんこの難点にカントは気づいていた。だから、『純粋理性批判』で、自然の現実と人間の認識とが一致することを求めて腐心したのである。しかし、経験的な世界において、あらゆる事象が人間の認識するとおりであることを検証することは不可能なのである。カントは、この問題を、統整的な原理の要請という言葉で表現した。認識が到達した普遍的な法則は統整的な原理として働く、と期待するのである。

ここで人間の認識がまぬがれないこの難点について一つの註釈を試みてみよう。スピノザの体系が規定しようとする世界の必然を、認識論に基づいて到達される普遍法則の総体と見なせば、スピノザの言う世界の必然は神と呼ばれて瑕疵がないとされるから、人間の認識がもたらす普遍法則の総体を支えることが可能になる。その上で、スピノザの世界体系から汎神に世界の果てまで退場してもらえば、一見、認識論のもたらす世界認識に移行するかのように見える。

しかし、認識論はスピノザの世界論と異なる。何よりも、スピノザの『エチカ』には、人間の知識が認識活動によってもたらされるという重要な視点が明示的には示されない。そして、理論体系はできるだけ少ない誰もが受け入れられる前提から組み立てられるべきだという論理の公準（数学に見られる）を尊重していない。論理を超越する神という言葉が、スピノザ（とデカルト）を公準から遠ざけたのだろうか。科学的認識理論が明らかにする世界ははるかに構造的で多様

かつ複雑であり、世界の説明を与える普遍的法則はスピノザの考えるような単純化された必然ではない。

物理学で歴史的に起きたことをふりかえれば、それを一般化することはできないが、統整的原理の要請が実際に効力を発揮した例が知られる。その例とは、相対性理論の発見である。19 世紀の末に、光の伝達に関連して古典力学に基づいては説明できない現象が見つかった。当時だれもが説明に窮したこの難題に対して、アインシュタインは、電磁気学から導かれる光速度不変の原理と、古典力学に反するが運動の記述についてあるべきだと考えられる相対性原理との二つを要請して、古典力学に代わる相対性理論にたどり着いた。パラダイムという言葉が流布して、天動説から地動説への転換が誇張して語られることが多いが、古典力学から相対性理論へのパラダイム転換では、説明と解釈の精緻化の側面が大きい。ニュートンの運動方程式は、相対性理論の近似式である。量子力学も、古典力学からのパラダイム転換であるが、ニュートンの運動方程式はシュレーディンガー方程式の近似式である。

ともかく、自然科学の普遍的な法則は可能なすべての事象で真であることを検証することができない。しかし、現代の哲学者が知識を論じる場合に、しばしば、科学的知識のこの難点を挙げ、それと対比する知識の難点も挙げて、相対主義的に併記して論述するのは学問的に誠実なやり方ではない。知識についてのどの哲学理論もここで論じた難点をもつ。そ

れを忘れて議論すれば、迷路に入りこむことになる。二つの学的理論を比較するには、人間の認識能力に照らしてどちらのアプローチがより有効であるか、論理運用の観点からどちらの理論の枠組みがすぐれているか、どちらが厳正な方法を用いているかなどを検討すべきである。自然科学では、現在到達されている普遍的な法則について、真でない事象は実際に知られていないのである。物理学では、相対論的でかつ量子力学的な法則が追求されているが、それは意味のある探求だと言うべきである。科学的認識論を基礎とする知見はいつも完璧への途上にある、と考えるのが妥当なのである。

(d)　概念操作に対する批判

プリチャード著『知識とは何だろうか　認識論入門』は、表題が示すように、(命題的)知識を主題とする。論述の初めの方に、「知識は認識論の理論化の最大の焦点である」という言明があり、「知識に価値があるか」という問いが発せられて、以後の考察が展開される。正直に言えばわたしは、そこから続くああでもないこうでもないというその論じ方に倦み疲れた。しかし、終局で、「良い人生とは真正の人生である」、「私たちが知識を気にかけるのは、それが生きるに値する価値ある人生に重要だからである」という文章に出会った。その基本の考え方に全く同意することができる。

不満が残るとすれば、認識論を知識論に狭めているという点である。そして、ここに至ってやっと、倦み疲れた理由が、

哲学の理論に関することだけにではなく、それ以前の、言葉の運用法すなわち概念の操作法にあることに気づいた。

プリチャードの教科書の第 1 章「開始準備」の初めには、―― 認識論者のほぼ全員が同意することが二点ある。一つは、*ある人が(命題)知識を所持するためには、その人はその命題を信じていなければならない*ということである。もう一つは、*その信念は真でなければならない*ということである――という文章が掲げられている。知識についてのこの規定が最初から頭痛の種であった。この文章は、知識と信念、真と信という言葉の常識的な意味から逸脱するように構成されている。現代の哲学者たちはどうして「知識」についてこのような無理のある規定をして考察を始めるのだろうか。

そう考えて調べたら、知識についてのこの考え方は、JTB（Justified True Belief）定式」と呼ばれる言説と関係していることが分かった。JTB 定式は、「信念が知識になるためにはどのような条件が必要であるか」という問いに対する応答で、プラトンに始まるという。Wikipedia は、その定式化を、ある命題についての信念は、① その命題が信じられている、② その命題が真である、③その命題を信じる人が信じるに足る理由をもつ、場合知識になる、かつ、これらが満たされる場合のみ知識となる、と説明している。JTB 定式は、本来、信念に関するものなのである。

欧米の哲学者たちが、中国流に言えば哲学の大祖と見なし

てきたプラトンの JTB 説を現代まで引き継いで議論する、その気持ちは判らないでもない。だが 20 世紀後半に、E. ゲティアが、「Is Justified True Belief Knowledge?」という 3 ページの論文で、JTB 説に対する反証例を挙げて、信念を知識につなぐ JTB 説が完全ではないことを示した（JTB 定式に則った命題の真偽を確かめるためにゲティアが提示した問いは、ゲティア問題と呼ばれるそうだ）。信念を適正に正当化することによって知識の規定としようとする JTB 定式は真なるものとして成立しないのである。

JTB 定式にある「正当化」の語をすべて無視して単純化すれば、中核にあるのが“*True belief is knowledge*”という文であることが分かる。この短絡命題を真とすることはむずかしい。逆に、プリチャードが知識について言っている文章を JTB 定式に近づけて縮約して表現すれば、「*人が所持できる知識は、真なる信念でなければならない*」となる。この文は、形容語「*人が所持できる*」と拘束条件「*でなければならない*」を伴えば、「知識」と「信念」という言葉がもつ概念的な差異をなお維持することができるだろう。だが、その付帯条件を忘れると、文の中核は“*Knowledge is true belief*”という短絡命題になる。この命題は、“*True belief is knowledge*”の逆命題であるが、こちらも真とは考えられない。

定式化の文の中核にある構造を知るために上のように単純化を行なえば、もともとの命題文に潜んでいる矛盾が何か

が明らかになる。二つの命題文が真とならないのは、「知識」と「信念」を、同値の形式で結びつけることに無理があるからである。ことは、前小節(a)〜(c)で議論した種類の理論の問題に加えて、もっと基礎的な言葉の運用すなわち概念の操作にかかわる問題である。

言葉の元来の意味に立ち戻らなければならない。日本語の哲学用語は多くがヨーロッパ語を翻訳するための造語だから、混乱を避けるためにヨーロッパ語で考える必要がある。定評ある英英辞典の一つロングマンの辞典を参照しよう。関係する言葉の説明を要約すると、次のようになる。

[knowledge（≈知識）]： 人が学習や経験を通じて獲得する情報、skill（技能)、understanding（理解)

[belief（信念）]： 何かが、definitely（確実）に真である、あるいは確実に存在する、というフィーリング

[true（真なる）]： 偽でない（という形容詞）、イメージしたり考案したりするのではない事実に基づく

[epistemology（認識論）]： 哲学の分野。（この分野は）われわれがどのようにして諸物について知ることができるか、われわれがどのようにしっかりと諸物について知ることができるかを取扱う

[recognition（日本語で認識）]： 何かが真である、または、重要であるということを、realize し(悟り）accept する(受けとる）act（営為・行為)

［cognition（日本語で認知）］：何かを知り・理解し・学ぶ過程

まず、JTB 定式が用いる「真なる信念」という語句が矛盾をはらむことが知られる。心が感じる「feeling」は、心が思い浮かべる「image」などと同種で、「true」が依拠できる事実とは異なる。「true」は feeling である「belief」を形容できず、「True Belief」は語義を逸脱した用語である。

上の箇条書きによれば、「信念」が人の心に生じる「感じ」であるのに対し、knowledge は、身心の鍛錬によって修得される「技能」および言葉や記号で客観的に表示できる「情報」も含む。「信念」と「knowledge」は異なるカテゴリーに分けられる概念であり、質的な差異をもつ両者を平板に並べて同値の関係で結びつけるのは本来無理なのである。

日本語の「知識」は理解や情報を含むことができるが、普通、技能を含むとは考えない。“知識は頭と心に宿り、技能は頭と体に住む”と言えるだろう。英語の「knowledge」が含む意味の広がりとは異なる。ところで、漢字の「知」と「識」について、漢和辞典は、「知」を「感じ知る」、「識」を「見分けて知る」などと説明する。〈知覚・知見・知者〉と〈識覚・識見・識者〉の用例も、“悟性的な「知」は頭で働き、理性的な「識」が心に至る”と示唆する。「知」と「識」は微妙に異なる意味をもつのである。認知と認識という言葉は、二字熟語をつくるときに知識の「知」と「識」のどちらを採

用したかのちがいだが、「知」と「識」に由来する意味上の差異をもつ。英語の recognition に認知という訳語を当てる例を見かけるが、英語でも、もともと知り理解し学習する過程を含意する「cognition」と、くりかえしを意味する接頭辞「re」がついて営為が強調される語「recognition」は、日本語の「認知」と「認識」と同様に、微妙な差異を含むのである。「epistemology」には認識という日本語がふさわしい。

ところで、英語の語義からすれば、「認識」とは「何かを識る営為」であり、knowledge の語義がいう「学習や経験」はちょうどその「何かを識る営為」に当たる。つまり、(命題)知識は認識行為から獲得された「識られたこと」を意味するのである。「識られたこと」を表現する日本語として知識がある。「知識」は「認識」活動によってもたらされるのである。プリチャードのように「*人が所持できる知識は、真なる信念でなければならない*」というような規定の仕方で、信念の方から知識を規定するのは適切でない。

それでは、「信念」はどこから来るのだろうか。本来動的な認識活動を時間軸に沿って段階に分けて考えるのが有効だろう。「知」と「識」とを「感じ知る」と「見分けて知る」のように識別する漢和辞典の語釈を一歩進め、ここではカントに習って、認識作用を、感覚に基づく直感・悟性・理性という能力で分けて考えよう。まず認識活動の前半で感覚に基づく直感および悟性によってもたらされた「知」を「覚知」

と呼び、次に認識活動の後半で悟性と理性によって「覚知」が格段に向上したものを「知識」と呼ぶことにしよう。このように定義する「覚知」と「知識」という言葉は、感覚から「知」への移行と「知」の「知識」への向上を暗に含むが、それぞれの段階で「達成獲得された成果」を表現する名詞としよう。ここで定義した名詞「覚知」は、ここまで用いてきた「認知する」という動詞の“動名詞”「認知」に当たる。「知識」の方は旧来の語義と一致するだろう。

漢和辞典を見れば、感・覚・認・知・識はみな動詞として説明してあり、語義の説明は大なり小なり重複する。最適な名詞を切り出すことはむずかしいが、ここでは上のようにした。

自省すると、認識活動前半で得られた「覚知」から「信念」が一足飛びに生まれるとは思えない。すると、JTB 定式が信念を知識と結びつけようとしていることからしても、「知識」が心に「信念」を生むという答えが得られる。後半の認識活動によって向上した知識はすでに人間の精神（≈心）に宿るのだが、心理作用が「知識」から心に「信念」を形成させる、と考えることができる。運動能力もかかわる技能や心理作用が心にもたらす超越的理念を含めて、まとめて表現すれば、人間の「認識活動」は、「覚知」→「知識や技能」→「理念や信念」をこの順序で形成するのである。

こうして、「覚知」と「知識や技能」と「理念や信念」は、同質の概念ではないことがはっきりする。同質でない概念

「信念」と「知識」には、〈信念は、人が獲得した知識から形成される〉というような関係づけが妥当なのである。関係づけでしかとらえられない「知識」と「理念や信念」を並べて競わせる議論がわたしを消耗させたのは当然であった。

それでは、なぜ偉大なプラトンは知識よりも信念を主体にする議論を提示したのだろうか。その理由は、プラトンが、「知識」とならんで「徳」を重んじ、「信念」によって両者を緊密に結びつけようとしたからではないだろうか。行為に臨んで徳をもたらすのは、単なる知識ではなく良い信念なのだから。

こう考えると、古代の哲学で、実践的な分野と並ぶもう一つの分野だった「epistemology」で主題にされたのが「知識」や「理念」だったことが理解できる。古代、「知識」とは別の概念である「認識という営為」についての理解が足りなかったせいだろう。以後の哲学者たちも、長いあいだ、多かれ少なかれプラトンの思想を引き継いで、知識や理念や信念を主題にすることが続いた。その状態で、「epistemology」は現代と微妙な差をもつ学的営為であった、と言えるだろう。

その状態を転換したのがカントである、とわたしは考える。人間はどのようにして事物事象の知識を得るのか根本から考察し、対象と認識主体の相対する世界を立て、識るための人間の能力を分析的に考察し、対象との相互作用によって得られる知覚が悟性と理性によって知識にまで組み立てられ、

さらに理念や信念が心に形成される、という一連の認識活動を深く理解できるようにしたのはカントの認識論だった、と。人間は、そういう整序された理論によって物事をより明確に識るのである。それ以前の understanding（理解）はまだ不明瞭さをとどめる。人間の knowledge・知識 は、カントがもたらしたコペルニクス的転回によって明確さを増した、とわたしは思う。

　なんにもせよ、知識は人間の動的な認識活動から得られるのだから、知識をもたらす認識についての考察がぜひとも必要なのだ。その考察は、人生において、認識活動が実践行動と一体になって良く生きるための営為としてなされる、と教える。認識と知識をこのようにとらえれば、―― 認識活動を鍛錬し、より真正な知識を得ることに努め、その知識から有徳な行動を導く信念を育めば、良い人生をつくりあげることができる ―― と信じて生きることができるだろう。

2023 年 6 月夏至　　海蝶　谷川修